

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 陳順益

陳順益氏の博士論文『台湾語と普通話の方向表現に関する対照研究—“来”“去”を中心に、日本語との対照も兼ねて—』は中国語の方向補語といわれるカテゴリーにおける台湾語と普通話（標準語）の統語上及び意味上の差異を主として認知言語学の立場から考察し、明らかにしようとするものである。論文は序章と本論の6章から構成されている。

序章では台湾語、普通話、台湾華語の用語について定義を行い、台湾語を閩南語の下位範疇として扱った。第1章では本論文の研究動機、目的及びアプローチを述べ、事例研究として、ほぼ同じ意味を表すとされる普通話の方位詞“上”と台湾語の方位詞“頂 *teng*”の違いを分析し、説明した。第2章では方向補語の普通話と台湾語における構造上の差異を指摘したうえで、その差異の生じる原因を解明した。そして従来ほとんど言及されなかった台湾語の方向補語における特殊な音韻現象についても言及し、そのメカニズムを明らかにした。続く第3章と第4章ではそれぞれ台湾語と普通話の“去”と“来”の意味拡張における相違を明らかにすると同時に、台湾語の“去 *ho*”と“来去 *laikhi*”を統語的特徴のみならず、音韻、意味さらに通時的視点も加えて、再検討し、独自の分析を試みた。第5章では台湾語と普通話の“来”、“去”のダイクシス及び結果性における相異を分析し、先行研究の不備を修正し、その使用条件を究明した。第6章では本論文の結論を述べるとともに、本研究によって得られた新たな成果と知見を提示した。

本論文は、主として以下の事実を明らかにしたことによって、普通話および台湾語の文法研究ならびに関連分野の研究におおきく貢献している。

- (1) 普通話と台湾語の方向補語から成る複合動詞は統語上、様態を表す主要動詞 (V) と移動の経路を表す動詞 (x) 及び移動の視点を表す動詞 (y) に分けることができ、さらにそれぞれの複合動詞は場所目的語 (G) を取ることができる。しかし、両者が場所目的語を取る場合に語順の違いが生じ、普通話では V x G y (様態+移動経路+場所+視点) となり、台湾語では V x y G (様態+経路移動+視点+場所) となる。このことから、普通話では X は必須要素、Y は追加情報であるのに対し、台湾語では Y は必須要素であり、X は追加情報であると分析することが可能である。そして言語類型論の視点から移動イベントのタイプを「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」に分類した Talmy の言語理論に基づけば、中国語が「動詞枠付け言語」と「衛星枠付け言語」の混合型であるとする従来の説は妥当であり、台湾語にも同様の特徴づけが可能である。
- (2) 普通話と台湾語の“出”が場所詞をとる場合、普通話では起点と着点の両方を表せるのに対し、台湾語では着点に限られる。この、従来指摘されることのなかった両言語間の差異は、普通話では場所詞の後に“来、去”が現れ、台湾語では場所詞の前に“来、去”を義務的に伴うという統語上の違いに起因すると考えることによって、妥当な説明が得られる。

- (3) 台湾語の“来”、“去”を伴う方向表現において、後ろに他の成分が続く場合、“来”、“去”を含む方向補語の部分の声調が声調交替規則から逸脱して調値が全体に高くなるという現象が今回新たに観察された。従来“去”だけについて指摘されてきたこの種の変調現象は、実は、“来、去”を伴う方向表現全体の変調現象として捉えなおすべきものであり、従来の「再変調」説は再検討を要する。
- (4) 台湾語の受身を表す形式“去 ho”に関して、従来は、khi-ho の khi が“乞”から変化したものであるとする説と、もともと“去”であるという説とがあるが、通時的な視点をも加えた上で、その音韻、統語、意味上の特徴を検証すれば、“乞”説に一定の妥当性が認められはするものの、“去”説にも認知的視点による動機付けが十分に見出せる。
- (5) 台湾語においては、従来、方向補語の y としては、“去”、“来”のみに関心が寄せられ、“来去”という形式に関してはほとんど議論されなかった。本論文では“来去”を y の範疇に取り込み、その用法を観察することによって、次のような特徴があることが明らかになった。①基本的に主語は第一人称の単数もしくは複数に限られる、②未来の出来事のみを表し、過去の出来事を表すことができない。③具体的な空間移動しか表さず、抽象的な意味を表すことができない。このような特徴を持った“来去”は“来”、“去”のいずれとも異なる機能を持つものであり、台湾語の方向補語における第三の y として位置づけることができる。
- (6) “来”、“去”のダイクシスについては、普通話の“来”、“去”に関する従来の研究により、「普通話の“来”の到達地は発話時または指示時に、話し手または聞き手がいる場所を表すことができる」ということがすでに明らかにされているが、それに加えて、「ただし、“来”は、物理的・心理的距離の遠い指示詞“那兒”とは共起しない」という点を認識すべきである。また“来”、“去”の結果性の含意については、普通話、台湾語のいずれも、話者の視点や領域との関わりによって、“来”の方が“去”よりも結果性を含意しやすい傾向にあるという両言語の共通点と、台湾語の“来”の方が、普通話のそれに比べて、結果性の含意の度合いが相対的に弱いという両言語間の差異が認められる。

一方、本論文の問題点として次の諸点が指摘された。部分的ではあるが、異なる言語のデータの扱いにやや公平さを欠くところがあり、より慎重な言語観察と言語記述の姿勢が求められる。また現象や事実の指摘にとどまり、原因の分析が不十分な部分も若干見られた。図式に関していまま少し周到かつ明快な説明が期待される。

このように、本論文は以上のような若干の不備を残しつつも、近年の言語理論の成果を踏まえて、言語事実に則した詳細な分析と新たな解釈が示されており、また、台湾語に関する新しい指摘や知見も数多く含まれおり、全体として学術的な価値が高く、この分野における優れた研究成果として十分に評価に値するものである。

したがって本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。